最高学部（大学部）

2025 年度共生共創プログラムについて

遠藤　敏喜

2025 年度よりカリキュラムとして始動した、最高学部の共生共創プログラムの理念と制度を述べる。あわせて初年度の活動内容と学生の感想を紹介する。大雑把に総括すると、３回開催したフォーラムによって学部生全体の共生共創への関心は高まり、また研修拠点での実地研修には想定を超える学部生の参加があり、順調な滑り出しとなった。

1. 共生共創プログラムとは

最高学部（以下、単に学部と言及することもある）の共生共創プログラムとは、よりよい社会を目指す先駆的取り組みをしている実践者と繋がることで、学部生が社会の課題について視野を広げ、実社会において実践的な学びを得る機会をつくるプログラムである。一部2024年度に先行実装したものもあるが、2025 年度より正式にカリキュラムとして始動した。次の A と B の 2 つから成る。

A：共生共創フォーラム；年間 3 回、それぞれ 100 分ずつで開催する。先駆的な取り組みをしている実践者による講演である。

B：全国の研修拠点での実地研修；NPO 法人共働学舎（新得・寧楽・信州・南沢）、NPO 法人日本ブラインドサッカー協会、大地×暮らし研究所、一般社団法人エシカル協会、株式会社フィールドプロ、パタゴニア、株式会社 UPDATER、奈良山園、NPO 法人 ARUN Seed、株式会社飯尾醸造、速水林業、NPO 法人ピッコラーレ、AMA ホールディングス株式会社、株式会社 CNC、株式会社 HITOTOWA、NPO 法人フリースペースたまりば、ほか（順不同）。

A の共生共創フォーラムは、実践者の取り組みについて、ウェブやニュースなどからでは聞けないような詳しいお話を伺う。学部生は、すべてのフォーラムに参加しなくてはならない。B の共生共創プログラムの研修については、全員必修というわけではないが、在学中に少なくとも１度はいずれかの研修先に参加することが奨励されている。現地で実践することでしか得られない体験があり、体験するからこそ見えることがあるはずである。

自由学園創立者のひとり羽仁もと子は、1932 年にフランス・ニースで開催された第６回世界新教育会議における講演「それ自身一つの社会として生き成長しそうして働きかけつつある学校」（英題：The School, A Society which Lives, Grows and Acts）において、「われわれはよい社会を創造しなくてはならない。そうしてわれわれは“たしかによい社会を創り得る”という自信と希望を、その体験を通して被教育者に与えうること、そのことのみが、変遷しつつある社会に、もっとも有力なるものとして、かれらを活かしめ得る唯一の方法である」と述べている。また、もうひとりの創立者である羽仁吉一は「学校それ自身活きた社会として、より大きな活きた社会と有機的に連なることによって、最良の教科書である時勢を読み取り、偉大なる教師である時勢の直接教育を受け得る機会を、すべての子弟に与えよ。一口にいえば現在の学校制度を、あらゆる特権から解放して、もっと自由な、活発発地な教育を可能にすることだ」と述べている。共生共創プログラムは、ふたりの創立者の掲げた理念を、現代に引き継ぐプログラムである。

「共生」あるいは「共創」をキーワードとするプログラムは、いくつかの大学に散見する。例えば中央大学は、2014 年４月に、大学の本来的使命および機能としての教育研究に加えて「社会連携」と「社会貢献」を新たな使命として位置づけることを宣言したが、2026 年１月に、所在地の八王子市と「人財育成共創プログラム」に関す

る覚書を締結している。立教大学は、国際化戦略の一環として、2021 年度から、ソウル大学校・北京大学・シンガポール国立大学の 3 大学と連携し、現代のアジアや国際社会の諸課題について思考し、行動できる人材を育成することを目的とする「ACE プログラム」を立ち上げている。東京藝術大学は、43 機関が参画する「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」（通称：ART 共創拠点）を 2023 年にたちあげ、福祉・医療・テクノロジーを融合したアートコミュニケーションによって、誰もが「自分らしく」を実現できる共生社会を目指している。城西国際大学は、学生主体で地域の課題解決に取り組む「域学共創プロジェクト」を掲げて、2025 年度は「障がい者の『生きる』に寄り添うコミュニティケア」「山武市在住高齢者のデジタルデバイド解消プロジェクト」「地域に住まう人々の健康増進と 障害予防に向けた実践活動」「山武の豊かな自然を保全し活用するプロジェクト」など 9 つの授業を展開している。新潟大学は、新潟を若者が活躍したくなるようなより魅力的な地域へと発展させるべく大学が培った知をもとに社会との共創により地域創生を目指す「共創イノベーションプロジェクト」（共創 IP）を 2022 年度より開始している。これまでに「佐渡共創 IP」「防災街づくり共創 IP」「コメ共創 IP」などを展開している。

自由学園最高学部の共生共創プログラムは、上述のプログラムと、その目指すところは共通している。ただし、自由学園においては、卒業生が積み重ねてきた創立以来の実績があることを申し添えたい。これまでの卒業生が切り開いた多種多様な進路の道筋については、自由学園公式ウェブサイトの「自由学園 100 人の卒業生プラス」（https://www.jiyu.ac.jp/jgs100/）を参照されたい。今回の本学のプログラムは、これまでの実績をカリキュラムとして取り入れることで、卒業後ではなく在学中からチャレンジできるようにする試みである。

なお自由学園では、高等部でも「学園での社会づくりの経験を実社会で実践する」というコンセプトのもと、「飛び級社会人」制度が全生徒の必修授業として導入されている。2024 年度には、総人数 166 名のうち 3 分の 2 の生徒が毎週水曜日に企業あるいは団体で就業体験し、残り 3 分の 1 の生徒も宿泊を伴う短期集中で就業体験をした（共生学「飛び級社会人」参照）。

2. 共生共創フォーラムについて

2.1. フォーラムの概要

共生共創フォーラムは、1 章で述べたように年間 3 回それぞれ授業 1 コマ分（100 分）の講演会が開催されるが、各回にはテーマが設定される。学部生は、テーマに依らず、すべての回に参加しなくてはならない。学部生以外の聴講も事前申し込みによって可能であり、オンライン同時配信も録画配信も行っている。フォーラムを欠席した学部生は録画配信を視聴する。フォーラムは学部のリベラルアーツと共生共創の接点である。事前・事後の学習とあわせて、学問的視点からも理解を深め、自分の可能性を広げるとともに、社会に貢献する力として昇華させることが期待される。学部生には、フォーラム開催前に、その回のテーマについての解説が学部教員によってなされ、予備知識や関心の度合いを問う事前アンケートが実施される。フォーラム開催後には、リアクションペーパーの提出が要求される。単位および評点による成績評価はなく、成績表には年度ごとに「認定」「不認定」が記載される。不認定の場合は、該当年度のテーマについて補講対応あるいは課題対応がなされる。

2.2. これまでの共生共創フォーラムのテーマ

共生共創プログラムは、1 章で述べた通り、カリキュラムとしては 2025 年度からの始動であるが、フォーラムは、その前準備として 2024 年度から導入されている。これまでに開催されたフォーラムを表 1 に示す。

2.3. 学部生の関心とその変化

今年度のフォーラム（表 1 の第 4 回から第 6 回まで）では、学部生に対して、事前アンケートと事後リフレクションにて、テーマへの関心度を 5 段階評価で尋ねた。事前アンケートの回答数は 90（回答率 46.

表 1：これまでに開催された共生共創フォーラム（敬称略　所属は開催時）

番号	年度	日にち	テーマ	講師
第 1 回	2024	6 月 26 日	共に生きる社会を創る	松崎英吾・高橋めぐみ（NPO 法人日本ブラインドサッカー協会） 福澤和雄（NPO 法人共働学舎）
第 2 回	2024	10 月 1 日	元気に繋がる地域づくり	矢田明子（株式会社 CNC） 今村智之（株式会社まめーず） 荒昌史（株式会社 HITOTOWA）
第 3 回	2024	2 月 19 日	食と農で拓く未来	木村純平（パタゴニア日本支社） 野崎林太郎（奈良山園）
第 4 回	2025	6 月 4 日	社会的投資でひとりひとりが輝く世界を	功能聡子（NPO 法人 ARUN Seed）
第 5 回	2025	10 月 1 日	地球環境を守る技術を求めて	三上正洋（株式会社フィールドプロ） 沖山敬（株式会社 UPDATER）
第 6 回	2025	2 月 18 日	公害を語り継ぐ～対立を超え未来を創る	小泉初恵（水俣病センター相思社） 林美帆（岡山理科大学） 原子栄一郎（東京学芸大学）

9%）で、事後リフレクションの回答数は 46（回答率 24.0%）であった。この回答数は 3 回分の合算である。フォーラム前とフォーラム後の関心度の回答の割合の推移を帯グラフにした結果を図 1 に示す。テーマについて「とても関心がある」と答えた学部生は、12.2%から 19.6%へ 7.3 ポイント増加し、「やや関心がある」は 36.7%から 43.5%へ 6.8 ポイント増加した。一方、「あまり関心がない」と答えた学部生は、6.7%から 4.3%へ 2.3 ポイント減少し、「まったく関心がない」は 7.8%から 0%へと減少した。図 2 のように可視化すると、学部生全体として、関心度が高まったように見えるが、事後リフレクションの回答率が低いため、関心が高まらなかった学部生は回答しなかったとも考えられる。

そこで「とても関心がある」から「まったく関心がない」までの回答をそれぞれ 5 から 1 までの数値に置き換えて平均値を算出したところ、事前の関心については 3.39、事後は 3.78 で、事後の方が高かった。この結果が学部生全体でも言えるかどうかを、統計的検定を使って検証した。平均値に関する検定手法は多数あるが、5 段階評価データは順序尺度であるため、ノンパラメトリック検定を適用する必要がある。今回のデータは、事前のみあるいは事後のみしか提出していない学部生もいる対応のないデータとなるため、ウイルコクソンの順位和検定（ホイットニーの U 検定）を用いた。統計解析ツール R を用いると、p 値が $0.0499<0.05$ であり、有意水準 5%で有意差が見られた。すなわち、フォーラムの開催によって、学部生全体の関心度は高まったと言ってよいであろう。

2.4. 学部生の感想

学部生は、毎回のフォーラムをどのように感じたのだろうか。リフレクションでは「学んだことや感じたこと」を自由に記述する設問を設置したが、その回答からいくつか特徴的なものを紹介する。なお、文章は基本的に回答の原文をそのまま利用しているが、意味が変わらない範囲で、一部置き換えを行っている。

2.4.1. 第 4 回フォーラム

「社会的投資でひとりひとりが輝く世界を」をテーマに、NPO 法人 ARUN Seed の功能聡子氏にご登壇いただいた。お話の概要は自由学園最高学部のウェブニュース（最高学部 2025a）を参照されたい。

「“社会的投資”を初めて知り、考えることができた」という声が多かった。「単なる資金援助ではなく持続可能な社会変革の手段であるという言葉に力強い信念を感じた」「社会的リターンと経済リターンの両立を

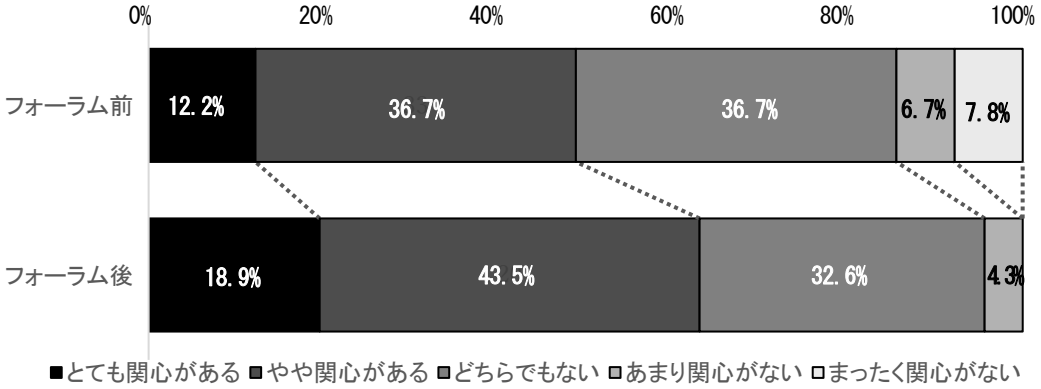


図 1：テーマに対する関心度の推移

目指す仕組みの部分がとくに興味深かった」「異なる文化や価値観を知ることで解放されるという言葉が印象に残った。自分にはない考えや価値観は自分の世界を広げてくれると感じていたので、ぴったりときた」「結果を共に創っていく関係性がとても理想的だ」などの声があった。

フォーラムの在り方として「後半にディスカッションをして話し合った内容を共有できたのは良かった」という声もあった。

2.4.2. 第 5 回フォーラム

「地球環境を守る技術を求めて」をテーマに、株式会社フィールドプロの三上正洋氏と株式会社 UPDATER の沖山敬氏にご登壇いただいた。お話の概要は自由学園最高学部のウェブニュース（最高学部 2025b）を参照されたい。

「エネルギーの重要性を改めて認識した」「最も身近にできる気候アクションに関わる“電気”と“発電”について、具体的なアクション方法と、その仕組みや意義をおふたりから教えていただいた」「天気を読むことの知識や経験は、養っておいて損はしない知識だと思った」「生きていく上で必ず必要な電力について学べてよかった」「地球環境や未来のために心を砕いて活動してくれている方がいることを学び、その存在を心強く思うと共に、自分も甘えるだけではだめだと気が引き締まった」などの声があった。

今回もディスカッションが好評で、「学部生・教員が講演中に登壇者と関わりをもつなど、学園との繋がりも分かりやすかった」という声もあった。また、「同級生が行っている活動についても知ることができ、自身が関わっていない学部での学びの広さを実感した」という声もあった。

2.4.3. 第 6 回フォーラム

「公害を語り継ぐ～対立を超え未来を創る」をテーマに、水俣病センター相思社の小泉初恵氏と岡山理科大学の林美帆氏にご登壇いただいた。小泉氏はオンラインでのご参加である。また、コメンテーターとして東京学芸大学の原子栄一郎氏にもご参加いただいた。お話の概要は自由学園最高学部のウェブニュース（最高学部 2026）を参照されたい。

「“思い出せる”ということが大切だというお話は、私にとって大きな考えの転換となった」「必要な時に取り出せるようにすることがとても重要かつ優しい姿勢だ」「辛い歴史や経験も、面白みを持って伝えなくては伝わらないというところに、新たな視点と難しさを感じた」「学問研究の観点から導かれる成果だけでは社会課題は解決しない。専門性や立場を超えた場面から対話を通じて理解を深める。この一連の活動にとくに共感した」「これから小さい地域に入っていく自分として

は“よそ者は当事者にはなれない”と言う言葉がとても重く感じたが、“うちからは見えないものがある”に強く共感した。当事者にはなれなくとも、外からしか見えない課題にアプローチしていけるように、感性を磨いていきたい」などの声があった。

3. 共生共創研修について

3.1. 研修の概要

共生共創研修は、1 章で述べたことの繰り返しになるが、よりよい社会を目指す先駆的な取り組みをしている企業や団体へ学部生が赴き、現場で実践的に学ぶものである。これは必修ではなく、学部生の希望者が行う自由選択プログラムであるが、フォーラムを含む学部の学びで得た知識・技術を実践力へ高める重要な活動であり、これを行うことで学びの PDCA サイクルが機能する。

研修の期間は、研修先の受け入れ可能時期にも依るが、1 日から最大半年間まで、学部生自身で設定することができる。ただし、最高学部の他の授業との兼ねあいもあるため、長期休み期間を利用したり、春期（4 月から 9 月まで）あるいは秋期（10 月から 3 月まで）のいずれかに収めたりすることが望ましい。研修中の必修授業の欠席や期末試験については、代替措置が取られるが、自由選択の授業については、科目登録で学部生自身が受講時期をずらすなどの調整をする。さきほど最大半年間と記したが、学校との両立が可能である場合、半年を超える研修も認められる。なお、研修で学校を離れる期間が半年を超える場合は、ギャップイヤー制度を適用する、あるいは休学して行うことになる。各研修には窓口となる指導教員がつく。研修を希望する学部生は、開始１ヶ月前をめどに「共生共創研修申請書」を提出する。届出のあった研修について、最高学部教師会で審査のうえ研修の可否を決定する。研修終了後は、学部生の前で研修報告を行い、「共生共創研修報告書」を提出する。最高学部教師会で審査のうえ研修の単位を認定する。

共生共創研修を行うにあたっては、共生共創フォーラム以外にも、次にあげる授業が直接的な事前学習の役割を担う；1 年生必修「フィールド研究基礎」、1 年生必修「ネイバーフッドデザイン」（2026 年度入学生より「自由学園と南澤学園町の歴史と未来」に科目名称変更）、1・2 年生選択必修「環境社会学」、1〜4 年生の自由選択科目「日本の里山・里川・里海と地域デザイン」「那須農場の学びと持続可能な農業・地域づくり」「都市環境工学」。また、生活カリキュラムとして、最高学部生は全員 1 年次と 2 年次にそれぞれ「飯能・名栗フィールド研修」を行う。また、2 年生は伊勢・奈良・京都組と九州組に分かれて研修旅行を行う（2026 年度以降、2 年生対象ではなく全学年を対象とする自由選択プログラムと変更）。後者には第6回フォーラムでご登壇いただいた小泉氏の水俣病センター相思社訪問も含まれる。

3.2. 今年度の研修

共生共創プログラムの研修は、入学後から卒業までの全学年で毎年行うことができるが、今年度はプログラムが導入された初年度であるため、2 回目という学部生はいない。学部生が今年度行った研修を、本稿執筆時点で進行中のものも含めて、表 2 に示す。研修に参加した学部生は 10 名であったが、これはギャップイヤー中や休学中などの学生を除くと、学部生全体の 15.6%にあたる。この他にも、研修実施とまでは至らなかったが、参加を希望した学部生が 5 名ほどいた。

今年度研修を行った学部生のうち、4 年生の 3 名は、卒業研究のテーマと関連していたこともあり、早い段階から参加を表明した。また、本研修以外にも自ら類似の活動に取り組んだ。1〜3 年生の研修の多くは、授業や学校活動とリンクするものが多い。1 年生の 1 人は 1 章で紹介した高等部の「飛び級社会人」で参加した研修先への再訪問であった。

3.3. 研修に参加した学部生の感想

学部生は、研修で何を学び、どのようなことを感じたか。提出された「共生共創研修報告書」からは、いずれも自分の学びとなって報告されている印象を受けた。本稿では紙面の都合上、紹介をふたつに留める。なお、文章は基本的に報告書の原文をそのまま利用しているが、

表 2：学部生が 2025 年度に行った共生共創研修
（進行中の研修については単位欄をハイフンで示す）

期間	学部生	研修先(場所)	単位
5 月 16 日 ～25 日	4 年生 M.A.	①更別コミュニティナース 株式会社まめーず（北海道更別）②本別生活学校（北海道本別）③共働学舎新得農場（北海道新得）④メノビレッジ長沼（北海道長沼）	2
8 月 6 日，9 月 10，14，17 日	1 年生 H.Y.	株式会社 HITOTOWA（東京都東久留米市）	1
8 月 25 日 ～29 日	4 年生 U.H.	一般財団法人 水俣病センター 相思社（熊本県水俣市）	1
8 月 31 日 ～9 月 5 日	4 年生 I.A.	コミュニティナースカンパニー（石川県能美市）	1
10 月 20 日 ～23 日	2 年生 O.R.	Creative Well-being Tokyo 誰もが文化でつながるオータムセッション 2025「居場所とわたし」主催：公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京（東京都豊島区）	1
11 月 13 日 ～21 日	3 年生 K.S.	第 25 回夏季デフリンピック競技大会東京 2025・サッカー審判派遣（福島県）	1
11 月 1 日 ～8 日	1 年生 M.S.	①白鳥林工協業組合②大洞峠周辺山林③ペンションリトルパイン④六ノ里地域づくり協議会（いずれも岐阜県郡上市）	1
2026 年 3 月 3 日 5 日，6 日	2 年生 S.H.	認定 NPO 法人フリースペースえん（神奈川県川崎市）	1
11 月 1 日 ～進行中	3 年生 T.K.	認定 NPO 法人ピッコラーレ（東京都豊島区）	―
2026 年 3 月 1 日 ～進行中	2 年生 A.K.	奈良山園（東京都東久留米市）	―

意味が変わらない範囲で、一部置き換えを行っている。

北海道で研修をした 4 年生は、研修前に目的として「自然に根差した生活を学びたい、心地よい地域・場所とは何かを探りたい、北海道の自然を体験したい」を挙げて 4 か所での研修に臨んだ。コミュニティナースでは高齢者との交流、地域活性化に関する企画を体験するなかで、「とにかくよく見てよく話す」「その土地の人になりきって何が必要なのか考える」「地域の方のやりたいことを引き出す」「正直な人になる」を心がけたという。メノビレッジでは羊のお世話、野菜の植え付け、小麦粉の製粉などに従事し、大地再生型農業の理解を深めた。「草食動物の重要性を理解した」「土を見るだけでなく、周りの環境も含めて考えることが重要だ」などの気づきがあり、「自然からいただくだけではなく、それを返すことがポイントだ」と感想を締めくくる。研修の報告は保護者会でも本人によって熱意をもってなされた。

夏休みに石川県能美市でコミュニティサポーターとして研修をした 4 年生は、その目的を「コミュニティナースとは何かをつかみ、自分も実践者として何ができるかを考える」と掲げた。研修では、養成講座を受講し、社会報告会の参加を経て、町内会の活動に多数参加した。研修後も習った編み物を継続し、作品を郵送で送ることで、活動を継続した。研修を振り返って、学部内の報告で語ったことは「コミュニティナーシングは“在り方”であった」「ひとつの地域を広く見ると、同じ市でも性質や文化が違う。地域に深く入る面白さが感じられた」「人は何に生きがいを感じ、何によって生き生きとできるのか。“生き方”について考えさせられた」であった。

研修に参加した他の学部生の報告では「また来てね、また行きたいが生まれる関係性がある」「自由度が高い」「研修先を新たに増やすことができる」「学校から出ることで学べることはかなり多い」「学外研修とはまた違

った目線での学びがある」などの声が聞かれた。また多数の意見として「研修に参加すると、いやでもコミュニケーション力が養われる」とのことであった。

4. 結びにかえて

羽仁もと子（1950）は「学校が社会に働きかけてゆくことが、学生個人のよき教育であると同時に、社会改造のもっとも適格な正道であると信じえるようになりました。どうか学校は単に人材を送り出すところであるという思いにかえて、教育は新社会をつくるものであるという信念を打ち建ててゆきたいと思います」(p.41) と述べている。この言葉を本稿の結びとして引用する。

自由学園最高学部が目指すべき姿は、拙稿（2023）でも述べた通り、各種学校ならではの自由度を活かし、教育・研究の卓越性を追求することであるが、それは共生共創を通して新しい社会の創造に資するプラットフォームへと最高学部が深化することでもある。

謝辞

共生共創プログラムにご協力くださったすべての方々に感謝申しあげます。フォーラムにご登壇くださった皆さま、研修に学部生を受け入れてくださった企業・団体に、この場をお借りして厚くお礼申しあげます。また受け入れ表明をいただいたにもかかわらず学部生の参加に至らなかった企業・団体にも、改めてお礼申しあげます。来年度も引き続きご支援いただければ幸いです。

なお、本稿の執筆にあたり、学部長の高橋和也先生にご助言・資料提供をいただきました。感謝申し上げます。

引用文献

遠藤敏喜 (2023), 楽しみつつ全力で社会へ働きかけた１年間,『自由学園年報』27 号より「この 1 年間の各部の取組み 最高学部」, https://www.jiyu.ac.jp/documents/annual_report.php（2024 年 10 月 31 日公開）

自由学園最高学部（2025a）, 第 4 回共生共創フォーラム「社会的投資でひとりひとりが輝く世界を」が開催されました, 自由学園最高学部 NEWS, https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/ld/72027 (2025 年 6 月 11 日公開)

自由学園最高学部（2025b）, 第 5 回共生共創フォーラム「地球環境を守る技術を求めて」が開催されました, 自由学園最高学部 NEWS, https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/ld/72754（2025 年 10 月 10 日公開）

自由学園最高学部（2026）, 第 6 回共生共創フォーラム「公害を語り継ぐ〜対立を超え未来を創る〜」が開催されました, 自由学園最高学部 NEWS, https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/ks/73176（2026 年 2 月 28 日公開）

城西国際大学　域学共創プロジェクト https://www.jiu.ac.jp/clics/project/detail/id=18762

高松功太郎・長岡亜矢子 (2024),「高等部 飛び級社会人（共生学)」, 自由学園 年報, 第 28 号, https://www.jiyu.ac.jp/documents/annual_report.php（2025 年 10 月 31 日公開）

中央大学 (2026),「八王子市と「中央大学×八王子市 人財育成共創プログラム」に関する覚書を締結」、ニュース, https://www.chuo-u.ac.jp/news/2026/01/84173/（2026 年 1 月 22 日公開）

東京芸術大学（2023),「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」, https://kyoso.geidai.ac.jp/（2026 年 2 月 2 日閲覧）

新潟大学（2023）, 共創イノベーションプロジェクト, https://www.ircp.niigata-u.ac.jp/co-creation/ip/（2025 年 12 月 20 日閲覧）

羽仁もと子 (1950), それ自身一つの社会として生き成長しそうして働きかけつつある学校,『羽仁もと子著作集』第 18 巻 教育三十年（初版）.

羽仁吉一（1950）, 時勢は教育する,『雑司ヶ谷短信』上巻（初版）.

立教大学（2023),「ACE プログラム」, https://ace.rikkyo.ac.jp/（2025 年 4 月 17 日公開）